

## 第八章 奈良地方の塔

### 第 55 番 法隆寺五重塔—聖徳宗—

奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺

法隆寺駅から、法隆寺門前行きバスに乗り、終点で下車すると南大門が見えます。南大門をくぐり参道を進み中門を出ると、エンタシスの柱に支えられた回廊に囲まれて、向かって右に金堂、左に五重塔、正面後方に大講堂が見えます。これが世界最古の木造建築物かと思うと、感無量であります。

歴史は、用明天皇自らの病氣快癒の願いから誕生したといわれています。しかし用明天皇は完成を待たずに崩御され、推古天皇と聖徳太子が推古十五年（607）に寺と本尊を完成させました。

五重塔は、法隆寺を象徴する存在で、建立は白鳳時代、一辺 6.41m・総高さ 32.45mであります。緩やかな弧を描き、優雅で美しい堂々とした構えの塔であります。塔の建築では、軒の出や塔身の幅が上重に上がるにつれ順に小さくなっていくことを逡減といい、上重と下重の差が大きい塔は、逡減が大きいといえます。法隆寺では逡減率が 1/2 と大きく、どっしりとして安定感を与えています。九輪の最下部の輪に鎌が取り付けられており、空から雷獣が降りてきて塔が焼失することがないように守っています。塔の特徴は、柱に膨らみがあり、軒下の木組に雲形の斗栱、軒は一軒繁垂木で、冗くずしの勾欄が使われていることと初重に板葺きで、角柱で挿肘木を用いた裳階があることです。本五重塔と醍醐寺五重塔と瑠璃光寺五重塔をあわせて日本三名塔と呼んでいます。



## 第 56・57 番 興福寺五重塔・三重塔—法相宗—

奈良県奈良市登大路町

近鉄奈良駅から歩いて五分で、興福寺境内に着きます。

興福寺は藤原氏の氏寺で、前身は中臣鎌足の妻鏡女王が、山科に創建した山階寺です。現在地へは、平城京遷都に尽力した鎌足の子不比等の手で移され、興福寺と称しました。藤原氏の庇護で、氏神春日大社の神威を借りて大和の寺社を傘下に収め、中世に巨大な権力を誇った。治承四年に南都焼き払いに遭い、伽藍を全て焼失しました。その後も度々焼けたが、再興しました。享保二年の大火で伽藍の大半を焼いたときは、再興がかなわなくなり、明治の廃仏毀釈のとき、僧侶もすべて春日大社の神官になり、寺は荒廃しました。

五重塔は、境内の南端近く、猿沢の池に塔影を映して建っています。最初の塔は天平二年、光明皇后の御願によって建立されたといわれていますが、その後焼失・再興を繰り返し、現在の塔は六代目で、室町時代の応永三十三年（1426）に建立されたものです。室町時代を代表する和様の塔で、一辺 8.77m・総高さ 50.1mの本瓦葺き、堂々として安定感を与えてくれます。

三重塔は、境内の南面の隅、南円堂の背後の低地に建ち、平安末期の康治二年（1143）に崇徳天皇の中宮・皇嘉門院の御願で建立されました。鎌倉時代の初期に復興されたものが、現存するこの塔です。和様の塔で、一辺 4.84m・総高さ 16.18m、本瓦葺きの安定した形をしています。



## 第 58 番 六一山室生寺五重塔—真言宗室生派—

奈良県宇陀郡室生村

近鉄室生口大野駅で下車し、バスに約 20 分乗って室生寺前で降りて、川沿いに歩くと赤い太鼓橋が見えてきます。橋を渡るとすぐに仁王門が見え、門をくぐって鎧坂を登ると金堂があります。さらにその奥に本堂があり、石段を登ったところに五重塔があります。

室生寺の歴史は、宝亀年間に皇太子山部親王（後の桓武天皇）の病氣快癒のため、五人の修行僧が祈願を行ったのが寺の始まりとされています。その後、興福寺の賢景が朝廷の命を受けて、室生寺を開山し、それ以降、室生山一帯は山林修行の霊地として発展してきました。平安時代初期に、賢景の弟子にあたる学僧・修円が入山し、五重塔をはじめ現在まで残る伽藍を完成させました。室生寺が女性に門戸を開放した



した時期は明確ではないが、寺伝によると、鎌倉時代以降であります。その後いつの間にか、女人禁制の高野山に対比させて「女人高野」と呼ばれるようになりました。元禄年間に將軍綱吉の母・桂昌院の寄進を受けて堂塔の復興に当たっていることが「女人高野」の名を一層広めることになったようであります。

五重塔は、鬱蒼とした杉の巨木に囲まれて、ひっそりとしながらもしっかりと自己主張をして建っています。屋外の五重塔としては、最小ですが、法隆寺に次いで古い五重塔で、造りは堂々として大型の塔に決してひけはとりません。建立は延暦年間頃（781～805 頃）で、一辺 2.48m・総高さ 16.17m、檜皮葺きで屋根勾配の緩やかな和様の塔で、軒の出は深く、しっとりとした美しさを有しています。注目すべきは相輪で、宝珠・龍車・水煙の代わりに宝瓶と宝蓋を冠すという独特のデザインにあります。



## 第 59 番 談山神社十三重の塔

奈良県桜井市多武峯

桜井駅からバスで 25 分、談山神社バス停で下車し、5 分ほど歩くと赤い鳥居の前に着きます。石段を登ると右手に拝殿、左手に十三重の塔があります。

縁起によれば、蘇我蝦夷と入鹿親子の勢力が極まって国の政治をほしいままにしている時に、中臣鎌足と中大兄皇子（後の天智天皇）の二人は、多武峰の山中に登って「大化改新」の談合を行いました。後にこの山を「談い山」「談所ヶ森」と呼び、談山神社の社号の起こりとなりました。鎌足の没後、唐より帰国した長男の定慧和尚は、父の墓を摂津から移して、十三重の塔と講堂を再建し、堂宇を整えて妙楽寺（のちの多武峰寺）を開きました。そ

して大宝元年に弟の不比等が、鎌足像を安置した聖霊院を創建したのが談山神社の創起といわれています。神仏混交で栄えたが、明治の神仏分離令で神社だけが残されました。現存の塔は、享禄五年（1532）の再建で、木造十三重の塔としては、世界で唯一のものです。唐の清涼山宝池院の塔を模して建てられたと伝えられています。塔は、一辺 4.21m・総高さ 16.17m、檜皮葺きの緩やかな勾配の屋根を重ねた檐塔形式（えんとう）で、上に行くに従って徐々に逡減し、初層だけがとくに大きな屋根になっています。



## 第 60 番 法起寺三重塔—聖徳宗—

奈良県生駒郡斑鳩町岡本

日本最古の貴重な三重塔を拝観するため、斑鳩の里にある法起寺を訪れました。法隆寺前からバスに乗って、法起寺口前で下車し、のどかな田園風景の中、三重塔を目指して10分ほど歩くと、門前に着きます。

法起寺は、「岡本寺」とも「池後寺」とも呼ばれた聖徳太子によって創建された七つの寺の一つであります。聖徳太子が亡くなった後、王子の山背大兄王が太子の別宮・岡本宮を寺としたことから始まるといわれています。舒明天皇の七年（638）に金堂が建立され、天武天皇十四年から宝塔を建て始め、白鳳時代・慶雲三年（706）に露盤をあげたことが、露盤銘に記されています。金堂と塔の配置は、何故か法隆寺の配置と東西逆になっています。

三重塔は、恵施僧正の本願により、斗拱に雲肘木を用いた飛鳥様式の古様に則り、建立されています。一重の基壇の上に立ち、中央間は板唐戸、脇間は白壁で、軒は一軒繁垂木を用い、初層の柱は円柱でエンタシスが入っています。二・三層は卍崩しの勾欄をめぐるせ、各層の平面は法隆寺の一・三・五層と同一寸法で、一辺 6.41m・総高さ 23.9m、本瓦葺きの塔です。



## 第 61 番 薬師寺三重塔—法相宗—

奈良県奈良市西の京町

平成十五年に、金堂・西塔・中門・回廊に続き講堂がよみがえり、白鳳時代の伽藍を取り戻したと聞くに及んで、やっと平成十六年四月に出かけてみました。昭和三十年代に何回か行きましたが、当時は東塔と東院堂があるばかりのさびしい状態の寺でした。ただ、明治時代調査をしたフェノロサが、塔の姿を「凍れる音楽」と表現したことで有名であったことを記憶しています。当時と同じ近鉄西ノ京駅を降りて、あまりの変化にびっくりしてしまいました。写真では確認していましたが、実際に来て見ますと、ものすごい色彩と規模に圧倒される感じで、境内に入っていました。しかしながらこれが竜宮造りと呼ばれた創建当時の姿であると信じました。

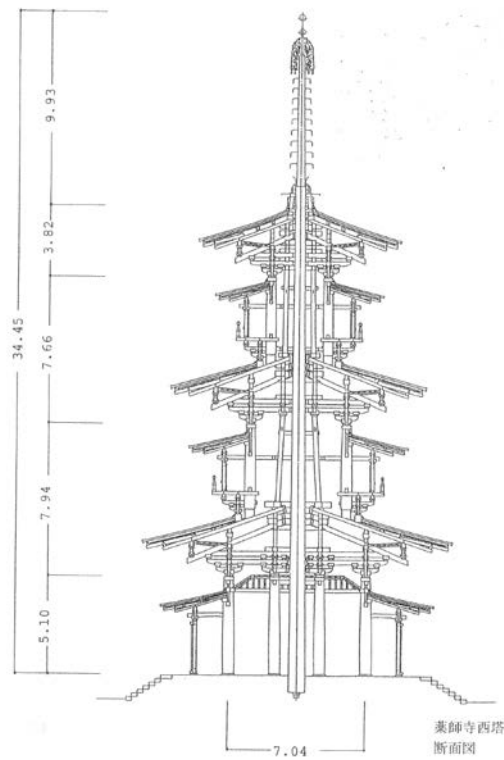
歴史は、天武天皇が皇后の病氣回復を願い、寺院建立を発願し、藤原京で造営を始めたが、その途中で皇后は回復し、逆に天武天皇が亡くなってしまいました。皇后は持統天皇となり、伽藍の造営を続行し完成させました。しかしながら、平城京への遷都に伴い、現在の地に移転しました。移転後は、度重なる火災や資金難で、伽藍は衰退し、享禄元年（1528）の兵火で東塔と東院堂を残して焼失してしまいました。そしてとうとう、昭和 51 年の金堂復興まで、復興の兆しを見せませんでした。

唯一創建当時の姿を残す東塔は、天



平二年（730年）とされるが、建築様式は白鳳時代のものです。東塔は、一辺7.09m・総高さ33.6mの三重塔ですが、各層の下に裳階と呼ばれる庇があり、六重塔のように見えます。その交互する大小の屋根が、生き生きとしたリズムを刻んでいます。特に相輪の頂部の水煙に飛天があらわれているのが、他に例を見ません。母屋の柱は胴張りのある円柱で、裳階の柱はそれより細い角柱を立てています。垂木は円形断面をもつ地垂木と方形断面を持つ飛檐垂木からなっています。それを支える組物は、三手先です。

西塔は、宮大工・西岡常一棟梁が、千年先に残ることを目指して復興にあたり、樹齢千年を越す檜を探し、創建当時に使われた工具を再現し、屋根が千年後に東塔と揃うように東塔より30cm高くして、昭和56年に竣工させました。





## 第 62・63 番 二上山當麻寺三重塔（東・西）—真言宗・浄土宗—

奈良県北葛城郡当麻町

創建時からの東西両塔がそろって現存している寺として、又五色に染めた蓮糸で「綴織當麻曼荼羅」を一夜にして織り上げたと伝えられる“奇跡伝説のヒロイン”中将姫像が祀られている當麻寺に、是非行きたいと思っていましたが、やっと念願がかなって巡礼してきました。近鉄阿倍野駅から電車に乗り、当麻寺駅で下車し、二上山を目指して15分ほど歩いたところに當麻寺は、あります。當麻寺は、真言宗と浄土宗の両宗並立の珍しい寺であります。

歴史は、推古二十年に、聖徳太子の弟である麻呂子皇子が、河内に三輪宗の寺として「萬法蔵院」を創建したのが始まりとされています。

その後、當麻真人国見が当地に移転し、「當麻寺」と改称されました。ところがあるとき、弘法大師が立ち寄り、「當麻曼荼羅」を拝して以来、真言宗の寺になったとされています。さらに鎌倉時代以降、當麻曼荼羅ゆかりのある中将姫伝説が阿弥陀信仰と結びついて浄土宗が入ってきました。このような変遷を経て、真言宗と浄土宗の塔頭が共存するようになったといわれています。

東塔は、塔頭中之坊庭園の南の高台に建ち、建立年代ははっきりしていないものの、法起寺について古く、奈良時代中期から末期頃とされ、飛鳥様式の三重塔です。特色は、基壇





上に立ち、初層の中央間が広いこと、柱が円柱でエンタシスが入っていることで、二・三層はともに柱間が二間であることがあげられます。中央間は板唐戸、脇間は連子窓で、一辺 5.3m・総高さ 23.24m の本瓦葺きで、西塔と比べますと逞しさと雄渾さを感じさせます。

東塔から 50m ほど離れて建つ西塔も、建立年代は不明ですが、東塔よりかなり遅れて平安時代初期とされ、和様三重塔の基本形といわれています。一重基壇上に立ち、二・三層は柱間三間となっており、中央間は板唐戸で、脇間は白壁となっています。一辺 5.17m・総高さ 24.81m の本瓦葺きで、穏やかで雅さを感じさせる塔です。



## 第 64 番 清水山吉田寺多宝塔—浄土宗—

奈良県生駒郡斑鳩町

「ぽっくり寺」として人気を集めている吉田寺（きちでんじ）は、王子駅から 10 分程バスに乗り、龍田神社前で降り、歩いて 3 分で門前に着きます。

歴史は、天智天皇の妹で孝徳天皇の後であった間人皇女の墓を祀る寺に、恵心僧都が来られ、寺として整えたといわれています。恵心僧都が、母の臨終の際に、魔除の祈願をした衣装を着させたところ、苦しむことなく往生が遂げられたいわれから、通称「ぽっくり寺」の異名がつけられました。ちなみに「ぽっくり」とは万葉言葉の“ほくり”が訛ったもので、ほくりは、完全・円満・安穩という意味です。

多宝塔は、寛正三年(1462)の銘があり、一辺 3.12m・総高さ 12.01m の小ぶりながら均整の取れた美しい塔です。塔身部はかなり細長いですが、軒の出は深く、釣合は取れています。下層中央間の中備えに本蛙股と板蛙股を上下に積んでいるのは、珍しい。



### 宮大工のざれごと一⑧明治元年政府発令の「神仏判然令」

神国日本を強調しすぎる令により、廃仏毀釈運動が起こり、仏教の抑圧、排斥、破壊が行われ、多くの仏教関係の文化財が失われる結果になりました。その後明治 30 年の「古社寺保存法」の制定により、やっと保護されるようになりました。特に興福寺は大きな被害を受けた寺のひとつです。興福寺の僧は全員、春日大社の神官となったため寺は無住となり、鎌倉時代の食堂やら細殿など多くの堂が破壊され、土塀や門も撤去されて他の用途に転用されました。今は国宝となっている五重塔が売りに出されましたが、取り壊しの費用のほうがかさむため、買い手がつかず、倒れるまで建てておくことになりめでたく現在に至りました。

## 第 65 番 靈禪山久米寺多宝塔—真言宗御室派—

奈良県橿原市久米町

久米仙人伝説で有名な久米寺の拝観のために、橿原市を訪れました。近鉄橿原駅から歩いて 10 分のところに寺はあります。

創建は、聖徳太子の弟来目皇子とも久米仙人ともいわれています。久米仙人は、吉野龍門寺に籠って神通力を会得し、空中を飛行中に吉野川で、洗濯をしている若い女性の脛を見て、神通力を失い落下した物語で有名であります。その後、聖武天皇の時代に、東大寺大仏殿の建立の際、神通力を用い、数日間で建設資材を運び集め、その褒章で久米寺を創建したと今昔物語や徒然草に記されています。

唐より帰国した空海が真言宗を立教開宗後、初めて大日経を説いた所縁の寺です。そのため空海を中興の祖としています。

一辺 3.78m・総高さ 12m の多宝塔は、嘉永初期に京都御室御所仁和寺から移設されたものです。奈良時代の巨大な大塔の礎石の上に立ち、組物は、下重は出組、上重は四手先、軒は上下とも平行垂木を用いています。特色は、屋根がトチ葺きです。





# 宮大工の知識—Ⅷ組物

斗拱

組物とは、軸部の上にあつて軒を支える部分の総称である。柱上には斗拱のほか、それらの中間に間斗束や葦股が入るが、これを中備という。組物は斗と拱(肘木)と丸桁(がぎょう)により構成される。

